

か い き が く え ん  
怪奇学園③

と し ょ し つ の ろ ほ ん  
図書室の呪いの本

ウェルザード・作

せ  
びろ瀬・絵



アルファポリスきずな文庫

# もくじ 目次

**第一章** 廃校から来た男の子…………… p6

**第二章** 人がいなくなった集落で…………… p51

**第三章** 禁足地…………… p102

**第四章** 屍妖の集落…………… p153

# 登場人物紹介

桜井春風

図書室に突然現れた謎の少年。原因不明の大量死があった廃集落にいたらしく……？

菜花春香

本作の主人公。運動も勉強も苦手だが、優しい心の持ち主。春夏秋冬班のリーダーで、仲間思い。

春夏秋冬班

次郎兵衛のじい様

頑固だが、集落の子どもには優しい。

八十兵衛のじい様

誰にでも優しく、集落一の博識。

秋本昂

クラス一の秀才、いつも冷静。実は運動が苦手。春夏秋冬班の一員。

雪丸冬菜

愛されキャラで、班の意見のまとめ役。春夏秋冬班の一員。

夏野太陽

友達を大切に  
熱い男の子。運動  
神経が良い。春夏  
秋冬班の一員。

## 第一章 廃校から来た男の子

「図書室には化け物を封印した呪いの本がある」

私はその話を聞いたのは、よりによって図書室の掃除をしているときだった。

クラスメイトで、掃除に飽きた様子のマサフミが、私を怖がらせようとしているのだろう。「なんだよそれ。どうでもいいけど、怖い話なら夏にでもやってくれよな。もう十月も終わるんだぞ」

呆れた様子で同じ班の夏野太陽が、首を横に振ってみせた。

「ビビってんのかよ太陽。マユと菜花はどうだ？ 気にならないか？」

ニヤニヤと私たちのほうを見て、「怖い」という言葉を引き出したのだろう。

私、菜花春香は怖がりです、怖い話は耳を塞ぐほどだ。

「ただ、そんな本を見たこともないし、ただ「そんな本がある」という怪談にもならない程度の話では、怖がることはなかった。

「バカじゃないの？ 私はね、さつさと掃除を終わらせたいの。サボってないで、菜花さんと夏野くんを見習ってよね」

「チッ。相変わらず口うるさいな、マユは」

「なんか言った!？」

マサフミはそれに返事はせず、マユが怒ると面倒だと言わんばかりに顔をしかめて、床をはき始めた。

この四季小学校には七不思議の一つに、「図書室の呪いの本」という話が確かにある。

でも、誰もその話の内容なんて知らないし、どこにもある適当に作られた怪談なのだろうと、特に気にすることもなかった。

掃除の時間がそろそろ終わろうかというとき、マサフミが驚いたような声を上げた。

「ん？ お、おいつ！ 立ち入り禁止の部屋が開いてるぜ！ きつとこの中に呪いの本があるんだよ。入ってみようぜ！」

言うより早く、いつもは鍵がかかっている部屋のドアを開けて中に入ったマサフミ。それを見て、怒ったような表情を浮かべたマユだったが、私はそれを宥めるように優しく声をかける。

「わ、私と太陽でマサフミを注意しておくから。マユちゃんはゴミを捨てに行つて。帰つてくるまでには引つ張り出ししておくから。ね？」

「あいつ、いつも不真面目で腹が立つよ。菜花さんと夏野くんに任せる。私が行くと、ひっぱたいてしまいたいそうだから」

「う、うん。任せて。ゴミ捨てを頼んでごめんね」

私の言葉に、逆に申し訳ないといった表情を浮かべて首を横に振つたマユ。

きつとマユがマサフミを止めに行くと、本当に手が出てしまうのだろう。

それがわかつていたから、私と太陽で行くしかなかった。

マサフミを連れ戻すために、立ち入り禁止の部屋に入った私と太陽。

黒い遮光カーテンで光が入って来ない小さな部屋の中は、埃っぽくて異様な雰囲気

漂っていた。

「なんだこの部屋……古文書つていうのか？ そんな感じの本ばかりだな」

太陽が言うように、本棚には紙を紐で綴じた物が多く、古文書という表現もわからなくはなかつた。

入り口の照明のスイッチを押すと、蛍光灯の明かりが部屋を照らす。

通路の奥に、マサフミがかがんでいるのを確認して、私は声をかけた。

「ちよつと、勝手なことしないでよ。マユちゃんが怒つたじゃない！ マサフミをひっぱたくつて言つてたよ!？」

「あいつが怒るのはいつものことだろ？ それより、普段は入れない部屋に入れるんだから、このチャンスを逃すわけにはいかないだろ」

何がチャンスなんだか。

立ち入り禁止つていうのは、何か理由があるから立ち入り禁止なわけで、開いているから入つていいというわけではない。

「出るぞマサフミ。こんなところを先生に見つかったら、俺たちまで怒られるだろ」

「やつぱりビビってるんだろ太陽。どうしてこの部屋が立ち入り禁止になってるのか考えないのか？ きつとあるんだぜ。呪いの本が。ここに」

嬉々としてマサフミがそう言った瞬間、生温い風がふわっと吹きつけたような気がした。何、今の風は。

窓は閉まっていて、風の流れなんてないのに。

それを感じたのは私だけなのか、太陽とマサフミは何事もなかったかのように話をしている。

「呪いの本なんてあるわけないだろ。俺たちを怖がらせて、ここに入らせないようにするために先生たちが作った話だろ」

「だったらなんでこの部屋が立ち入り禁止になってるんだよ。ここにあるのはただの古い本だ。別に見られて困るような……ん？ なんだこりや」

言い合っている最中、マサフミが目の高さにある一冊の薄いノートのようなものを見て、迷う素振りもなくそれを本棚から引き抜いた。

「あ、ダメだつて！ 戻しなよマサフミ！」

ハッと我に返り、太陽を押し退けてマサフミに駆け寄った私は、そのノートの表紙に書かれた字を見て眉をひそめた。

『高山小学校五年 桜井春風』

それは、私たちと同じ五年生の物であろうノート。

妙に不気味に感じたのは、ところどころについている黒い何かの痕のせいだろう。

「いてて……いきなり押すなよ菜花！ てかなんだそれ。なんでそんな物がこの四季小  
学校にあるんだよ」

「俺が知るかよ。というか高山小学校つて……山のほうにある何十年も前に廃校になったって学校だよな。ばあちゃんに聞いたことがある」

立ち入り禁止の部屋に、廃校になった小  
校の子どものノートがある。

それも、随分ボロボロで黒いものが付着し



ているという、不気味な物だ。

「……なんだ、ただの日記じゃねえかよ。なにになに？」

『今日もあいつらが来る。どうしてこんなことになったのかわからない。みんな変わってしまった。ユウキくんも、キョウコちゃんもみんなみんな。集落のみんなもどんどんおかしくなっている。僕もいつか、あんなふうになつてしまうのかな。声が聞こえる。僕を呼ぶ声が聞こえる。今日も眠れない。眠ったら、いつあいつらが来るかわからないから。こわいこわいこわいこわい』

そうマサフミが読み上げると、私も太陽も言葉を失った。

これが本当に日記だとしたら、一体何があったというのだろうか。

「……な、なんだよお前ら。やっぱりビビってんじやねえかよ。こ、こんなのただの作り話に決まってるだろ？ ウソ日記だよウソ日記。まだ続きがあるから読んでやるよ」

『やっぱり、六年生があれを壊したからこうなつたんだ。あの話は本当だつたんだ。今日もあいつらが来る。家のドアを叩いている。こわいけどもうダメだ眠くて。僕もあいつらみたいにな……』

マサフミがそこまで読み上げたときだった。

マサフミの手の上で黒い何かが侵食するように広がり、ノートを覆い尽くしてしまったのだ。

「ひ、ひっ！ な、なんだよこれ！」

慌ててノートから手を離し、床に落ちたと同時に、図書室のほうからバタツという音が聞こえて、私は驚きのあまり身体がビクツと跳ね上がった。

「なんだ今の音は！ 春香、行くぞ！」

「え、え!? ま、待ってよ太陽！」

慌てて立ち入り禁止の部屋から出た私と太陽は、図書室でおかしな光景を目にしたのだった。

マユがゴミ捨てに出て行って、誰もいないはずの図書室。

そこに、私たちと同じくらいの年の男の子が床に倒れていたのだ。

何が起こったかわからず、どうすればいいかわからなかつたけれど、倒れている男の子の顔をそっと覗き込むと。

「ひっ！ 血……血じゃないのこれ！」

服にも血の痕が確かにあつたけれど、顔を見てそれを確信した。

誰かに掴まれたような、手形に似た血の痕。

それが男の子の身体中についていたのだ。

「し、死んでるのか？ こんなに血塗れで……いや待て。息はしてる。生きてるぞこいつ」

「せ、先生を呼ばなきゃ！ 太陽！ 職員室に電話して！」

「お、おう、わかつた！」

慌てて図書室の電話の受話器を取る太陽。

なぜこの男の子は突然図書室に現れたのか、どうして血塗れなのか。

何もかもわからないままだったけれど、確実にこのとき、私たちはおかしな世界に足を

踏み入れたという実感があつた。

〈保健室〉

「それで、掃除をしていたら突然図書室に現れて倒れた……つて、そんな話を信じられる

と思う？」

先生たちによって保健室に運ばれた男の子は、顔の血を拭き取ってベッドに寝かされて

いた。

私は「私ほというと、太陽と二人で保健の柳先生に何が起こったかの話をしている。

「本当だって柳先生！ マサフミが立ち入り禁止の部屋に入って、俺と春香で早く出ろつて言つたらあいつがいつの間にか倒れてたんだよ！」

当のマサフミは、立ち入り禁止の部屋に入ったことがバレルのを恐れて逃げ出したのだけど、それも太陽によつてバラされてしまった。

きつと、あとでこつぴどく怒られるのは間違いないだろう。

「マサフミくんね。あの子は本当に。いい？ 図書室の立ち入り禁止の部屋には、古くて簡単に破れちゃうような本が置かれてるの。貴重な本だから、子どもは入れないようにしてるのよ」

まるで、私たちも中に入ったことがバレているような口振りに、ただ頷くことしか出来なかつた。

「それにしても……突然現れたなんて信じられないけど、この学校の子じやないし、どうして図書室で倒れてたのかもわからないわね」

「あいつ、大丈夫なのか？」

「ええ、余程疲れてたんでしようね。眠っているだけよ。あと、太陽くん。先生には敬語を使つたほうがいいわよ」

集団下校でとつくに他の児童は帰っている時間だったけれど、私と太陽は男の子が心配で、家族に迎えに来てもらおうという条件で学校に残ることになった。

「不思議な話ですね。図書室の立ち入り禁止の部屋で、おかしな日記を見た直後に男の子が現れた……ですか」

私たちだけではなく、「春夏秋冬班」の秋本昴と雪丸冬菜も一緒に。

「マサフミくんはもう帰つたよ。押しつけられちゃつたね。春香ちゃんと太陽くん」

二人の言葉に、苦笑いをする太陽。

「本当にな。でも、あんな姿を見たら黙つて帰れないつての。昴も冬菜も、もしも春香が

血塗れで倒れてたらどうする？ 放つておけるか？」

なんで私をたえで出すんだろう。

私を指さしてそう言つた太陽を睨みつける。

「私は……春香ちゃんが倒れてたら、絶対に助けられると思う」

「僕もですね。春夏秋冬班は助け合わないといけません」

小さな声だけで強く言う冬菜と、メガネをクイツと上げてハッキリと言う昴に、なんだか嬉しくなつた。

「だろ？ 友達が倒れてたら助けるのに、他人ならどうでもいいつてならないつての。それに……なんか嫌な予感がするんだよ」

「あれ？ 太陽も？ 私もなんだか、まずいことが起こつてる気がするんだ」

私たちがそう言うと、冬菜と昴は顔を見合せて首を傾げる。

「嫌な予感つてなんですか？ もしかして、マサフミくんが手に取つた日記が、『図書室の呪いの本』だつたとでも？」

あれが呪いの本かどうかはわからないけど、不思議だったのはあの日記がどこにもな

かったこと。

先生を呼んだあとにマサフミが部屋から出たときには、消え失せていたのだから。

「そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない。でもよ、あの日記を見たと同時にあいつが現れたんだ。どう考えてもおかしいぜ」

「確かに。この学校にはあんな男の子はいませんからね。これは何かの予兆なのでしょう  
か……」

太陽と昴がそう言いつて唸っていると、ベッドのほうから微かに声が聞こえた。

私と冬菜はベッドに歩み寄り、カーテンを開けると……男の子が身体を起こして恐怖に満ちた目で私たちを見たのだった。

「あ、目が覚めたみたい。大丈夫？ えつと、名前は……」

そう尋ねながら一歩近づくと。

「う、うわわつ！ 来るな！ 来るな化け物め！ 来るなつ！」

パニック状態で壁に背をつけるように後退りして、枕を抱えてそう叫んだのだった。

「えつ!? な、何!? こんなに可愛い子を、よりよって化け物呼ばわりですつて!? あ

んたねえ、心配して残つてたのに何よその言い草は！」

あまりにも腹が立つて、文句を言ってしまったけれど、どうやらそれが逆に男の子を落ち着かせたようだ。

「あ、あれ……化け物じゃ……ない？ よ、良かった……でも、ここは一体どこなんだ」

安堵したように大きなため息をついた男の子は、まだ混乱しているようだったけど、先程までのような恐怖に満ちた表情ではなくなっていた。

「ぶぶつ！ 化け物だつて。やつぱり春香の恐ろしさは初対面でもわかるのな」

「太陽、あんたひつぱたくよ」

「ごめんさい」

そんなやり取りを目の前で見せられて、男の子はどう思っただろうか。

安心した様子は変わらず、だけど笑顔になる気配はない。

「僕、先生を呼んで来ますね」

昴がそう言い、保健室を出て行った。

「春香ちゃん。ちゃんと自己紹介したほうがいいんじゃない？」

「あ、ああそうだね。私は菜花春香。で、こつちのバカなのが夏野太陽で、この可愛い子が雪丸冬菜。今先生を呼びに行ったのは秋本昴で、四人合わせて春夏秋冬班。あなたを見つけたのは私と太陽なんだよ」

「なあ、一体どうして図書室に倒れてたんだ？ いきなり現れたけどよ」  
太陽が尋ねると、男の子は何がなんだかわからないといった様子で。

「わからない……どうしてそんなところにいたのか。あ、自己紹介がまだだったね。僕の名前は桜井春風。五年生だよ」

「えっ？」

その名前を聞いて、私は思わず声が漏れた。

「春風か。ん？ 春風？ どこかで聞いたことがあるような……これってデ

ジャヴ？」

また太陽がバカなことを言い出した。

「何言ってるのよ。ついさっき名前を見たばかりでしょ！ 高山小学校五年、桜井春

風……でも、さすがに同姓同名だけだね？ もう高山小学校は廃校になってるし」



とはいえ、私だつてこの奇妙な偶然には、夢のような非現実感を覚える。

図書室で見つけた古い日記を見た直後、その持ち主が現れるなんてありえないから。だけど、春風の驚いたような返事で私は言葉を失ってしまった。

「よ、よくわかったね。高山小学校の五年生だつて」

そこまで言われて、太陽はようやく理解し始めたのか、頭を抱えて唸り出したのだつた。「ちよ、ちよつと待て……廃校になった小学校から来たのが春風で、でも高山小学校はもう廃校になつて……すまん、誰かもつとわかりやすく説明してくれ」

「さつきから言つてるけど、高山小学校が廃校つてどういうこと？ 確かにあんなことがあつたけど、僕は通つてたんだよ？」

太陽と違い、冷静に言葉を発してはいるけど、春風もまた違和感を覚えていたのである。うということとは、その目から微かに読み取れた。

そんな中で、冬菜が私の服の袖を引っ張る。

「ねえ、春香ちゃん。もしかして春風くんは、過去からやつてきたんじゃないかな？ その考えれば、高山小学校が廃校になったことを知らないのも、春風くんが高山小学校に

通つてたつて話もつじつまが合うと思うけど」

冬菜の言葉に、太陽は顔を上げ表情が明るくなつて。

「おお！ それだ！ ちよつとファンタジックだけど、きつとそうに違いなげ！」

何がそうに違いなのか私にはさっぱりわからないけど、この奇妙な出来事をとりあえず理解するには、そう考えるしかなかった。

「と、とりあえずそう考えるところ……でもまだ信じられないな」

私がまだ疑つてっていると、冬菜がポケットの中からスマホを取り出して、春風に向けて指さして見せた。

「春風くん。これ、何かわかる？」

「何つて……ガラスと金属の板？」

「これはスマホつて言つて、電話も出来るしパソコンみたいにいるんなことが出来る携帯電話だよ」

説明しながら画面をタップすると、色鮮やかなアイコンが並んだ画面が表示されると、同時に春風が目を見開き、スマホを食い入るように見つめたのだつた。

「け、携帯電話って……あの細長い電話じゃないの!? 田舎者だけど、見たことはあるんだよ。こんな形じゃなかった」

この反応は演技をしているとは思えないし、私たちに嘘をつく必要があるとも思えない。何より、私を見たときのあの反応は、本当に怯えている人のものだったから。

だとすると、やつぱり春風は過去からやってきたというのは本当かもしれない。

そんなことを考えていると、保健室のドアが開いて元気な声が聞こえた。

「柳先生を呼んできましたよ! どうですか、何かわかりましたか!」

入り口を見ると、昴と柳先生の姿。

「男の子が目を覚ましたって? それならあとは先生に任せて、みんなはおうちの人に迎えて来てもらいなさい」

ニッコリと笑う先生の顔を見て、私はこのあと春風はどうなるのだろうと不安になった。だって、過去から来たということは、廃校になった小学校に通っていると言っても先生には嘘だと思われる。

春風の家族が今はどうなっているかわからないし、何十年も経っているなら帰る場所

がないかもしれない。

私がそう考えていると、口を開いたのは太陽だった。

「先生ごめん! 血塗れでわかんなかったけど、こいつ俺の従兄弟の春風だった! 俺を驚かそうと学校に忍び込んだみたい!」

顔の前で手を合わせて頭を下げた太陽。

よくもまあそんな嘘を、スラスラと言えるもんだと感心してしまう。

しかし柳先生は太陽の言うことを信用していないのか。

「太陽くんは何度も先生に嘘をついているから、本当かどうかは男の子に聞きます」

「そ、そりやないぜ先生」

あっさり太陽の嘘を見抜いて、春風の顔を見て尋ねた。

「えっと、春風くん? どうして図書室に倒れていたかわかる?」

怖がらせないように、優しく尋ねた柳先生に、春風が私たちを見回して。

「すみません。太陽を驚かそうとして……偶然図書室にいるのが見えたので、学校に入っちゃいました。桜井春風です。太陽のお母さんと僕のお母さんが姉妹で」

「ふうん。じゃあどうして血塗れだったの？ 驚かすだけなら、どうして血塗れになる必要があったのかな？」

太陽の嘘に乗っかるように、春風も淡々と嘘をつく。

だけど柳先生はそれすらも見抜いているような質問を投げかけた。

これはまずいと、チラッと冬菜を見ると、小さく頷いて柳先生の服を引っ張った。

「柳先生……今日はハロウィン」

保健室の壁に貼られているジャック・オ・ランタンの飾りを指さして、冬菜はニッと笑ってみせた。

なんてタイミングと言い訳なんだと感心するしかない。

「そ、そうだけ先生！ トリック・オア・トリートだけ！ お菓子くれないの？」

「……はあ。わかったわ。でも太陽くんのご家族には説明してもらいますからね」

先生はまだ疑っているのだろう。

私たちは家族に連絡を取ると、親の迎えを待った。うちはどちらも働きに出ていなかったから、家が近い冬菜と一緒に帰ることに。

最初に来たのは太陽のお父さん。どうやら夜勤らしくて、運良く家にいたということだ。

「いや、先生いつもすみません。またこのバカが何かしでかしましたか？」

ペコペコと頭を下げて太陽に近づくとおじさんに、先生が一礼して尋ねた。

「いえ、太陽くんは何も。こちらの子が太陽くんの従兄弟と言っていて、学校に来たんですけれど倒れてしまつて……」

「へ？ 従兄弟？」

驚いたように春風と太陽を見たおじさんに、太陽はバチンバチンと音が聞こえそうなほどウインクをして合図を送っている。

それに気づいたのか、おじさんは思い出したかのようにポンと手を叩いて。

「あ、ああ。母親のほうの従兄弟ですね。何年も会ってないから名前が……でも間違いないですわ」

凄い。太陽のウインクだけで、おじさんが理解したように平気で嘘をつくなんて。

これにはさすがに柳先生も認めるしかなかったよう。

「そ、そうですか。ですが、他校に勝手に入るのはいけないことだと、注意しておいてく

「ださいね」

柳先生の言葉に、申し訳なきように頭を下げたおじさん。

「すみませんね。しつかり言っておきます。ダメだぞ！ トモナリくん！」

「いえ、春風です」

太陽たちがおじさんの車で帰っていくのを見送りながら、私たちが残りの三人は迎えを待っていた。

柳先生は呆れたように首を横に振り、職員室へ戻って行つたのを確認して、昴が口を開く。

「……えつと。僕が柳先生を呼びに行っている間に何があつたかわかりませんが、太陽くんの従兄弟というのは嘘ですよね？」

昴がいない間にいろいろ話が進んでしまったから、私と冬菜で出来るだけわかりやすく説明した。

理解出来ない話だから、昴は悩むかなと思つたけれど、そこはクラス一の秀才と言つて

きか。

「なるほど。となるとやはり、あの日記が何かの引き金となつて、春風くんを過去の世界から連れてきたということですか。これは実に興味深いですよ」

「あ、信じるんだ？ 私なんて未だに半信半疑なのに」

「世界中に、タイムトラベラーの話はありますからね。日本にも神隠しなんてものがありますし、そういうことが起こつてもおかしくないと僕は常々考えていますから」

理解が早いのは説明が楽で助かるけど、私はそれほど知識がないから、時々昴の言っていることがわからないときがある。

「とにかく、家に帰ったらみんなが集まって話をしよう。昴くんの家でいい？」

冬菜がそう尋ねると、昴は驚いたように。

「え、ええつ!? 冬菜さ……いや、みんなが僕の家に来るんですか!? ま、まあいいですよ」

そんなわけで、家に帰ったら昴の家に集まることになった。

太陽にも連絡して、私は冬菜のお母さんに家まで送ってもらって、ランドセルを部屋に置くと昴の家に向かった。

途中で冬菜を迎えに行つて、二人で昴の家に到着すると、もう太陽が来ているのか家の前に自転車がお置かれていた。

昴の部屋に入ると、ベッドに太陽が腰かけ、春風は床にあぐらをかいている。

「ささ、冬菜さんはこの座布団に。春香さんはベッドにでも座ってください」

「そう言い、やけに豪華な座布団を冬菜に差し出した昴」

「ねえ、冬菜と扱ひ違い過ぎない？」

「気のせいですよ。女の子を床に座らせるわけにはいきませんから」

「だって私とその座布団でもいいじゃないと思ひながらも、指示されるままにベッドに腰を下ろした。」

「さてと。みんな揃つたから春風にいろいろ質問させてもらうぜ。あの日記が春風の物だとしたら……何があつたんだ？ みんな変わったとか、あいつらが来るとか、怖いとかさ」

太陽があの日記の内容を尋ねると、春風は眉間に皺を寄せてポツリポツリと語り始めた。

「どうして僕の日記の内容を知っているのかわからないけど、見たのなら話すよ。ある日、六年生の何人かが肝試しで集落の禁足地に入つたらいいんだ」

いきなり私知らない言葉が飛び出したけど、それが穏やかではないものだという事だけはわかった。

「ね、ねえ。禁足地って何？」

「入つてはならない場所のことです。何かしらの理由があつて、立ち入りが禁止されると言われていますね」

立ち入り禁止と言われたら、なるほど、なんとなく理解出来た。

「で、六年生が禁足地に行つてどうなったんだよ。何かを壊したつて書いてあつたけど」

「あ、ああ。僕も禁足地のことはわからない。入ることが出来ないからね。でも聞いた話だと、いくつも石が積み重なっている場所があつて、その石を一つ取つたらそこにあつた石が全部崩れたつて。六年生にそのときの石だつて見せてもらったんだ」

それを聞いて、昴の表情が曇つた。

何か思い当たることがあるのかと見てみると、タブレットを取り出して検索し始めた

のだ。

「それは……積み石ではないですか？ 願かけや供養のために行われるらしいですが……まさかそれを持ち帰ったのでは」

私たちにタブレットを見せる。

そこには、石が塔のように積み重ねられた画像が表示されていた。

「禁足地に積み石……何か隠したいことがそこにあったのかもしれないね」

「それはなんとも言えませんが、春風くんの話の続きを聞いてから考えましょう。それで、そのあとどうなったんですか？」

私と太陽だけだったら、何がなんだかかわらないまままだ話を聞くことになっていただろう。



冬菜と昴がいてくれて本当に良かったと思うよ。

「それで……集落の人たちが変わったんだ。動きがカクカクするようになって、人を襲うようになった。高山小学校でも、その六年生が放課後にはおかしくなって、次々と友達を襲うようになったんだ。その姿はまるで映画なんかで出てくるゾンビみたいだったよ」

急に話の展開が変わった。

それは、私には想像も出来ない気味の悪いもので、友達が友達を襲うなんて考えたくないことだ。

「ゾンビって……じゃあ何か？ それに噛まれたらまた新しいゾンビになるってのか？」  
「噛まれたらそうなるのかはわからないけど、昼間はまだ人間なんだよ。おかしい感じはあるけどね。でも、夕方になると変わり始めたんだ。みんな、まだ変わっていない人を探して集落中を動き回っていたよ」

だから、春風は眠れないって日記に書いていたんだね。

そんな状況だったら、私も寝ることなんて出来ないかもしれない。

「なんだよそれ……そんなの子どもがどうこう出来る話じゃないぜ！ それで、春風はど  
うやって四季小に来たんだよ。それがわからないんだよな」

「そんなこと僕に言われても……気づいたら保健室にいたからなんとも。でも、その前は  
部屋で日記を書いて眠気を我慢してたのは覚えてるよ」

つまり、元の時代に戻る手段もわからないわけだ。

それは昴や冬菜も考えていたみたいで、そもそもなぜ春風がこの時代にやってきたのか  
ということもわからないままで。

「……よし。明日は土曜だから行ってみるか、高山集落によ」

またとんでもないことを太陽が言い出したよ。

「は、話聞いてた？ みんなおかしくなって、人を襲うゾンビがいるんだよ！ 私たちだ  
けで行って、どうなるって言うのよ！」

「それについては安心してください。春香さん。高山集落は、高山小学校の廃校と共に  
三十年前になくなったはずです。住民の原因不明の大量死によって……と、ネットに書  
かれていますよ」

「原因不明の大量死があったところなんでもっと行きたくないっての！」

何が悲しくて休日に、そんな恐ろしいところに行かなければならないのか。

本当に太陽と昴はこういうことに妙に乗り気なんだから困るよ。

「でも、このままだと春風くんがずっと帰れないままでよ。春風くんが私たちと出会ったつ  
てことは、意味があるのかもしれないよ？」

冬菜まで。

そんな風に言われると、まるで私が人でなしみたいじゃない。

「みんな、いいのかい？ 友達でもない僕と一緒に、集落に来てくれるの？」

「何言ってるんだ。ここまで話を聞いて、一人で行けなんて言えるかよ。お前も名前に春が  
入ってるし立派な春夏秋冬班だ。俺たちに任せておけよ！」

勝手にそんなことを言っつて、私は承諾してないのに。

それでも、みんなからの視線がとても断れるような雰囲気ではなかったたので、私は諦め  
たように叫んだ。

「わ、わかったよ！ 私も行けばいいんでしょ！」

話したいことはいつぱいあったけど、あまり遅くなるとお母さんに怒られるからこの日は家に帰った。

お父さんは出張中で明日帰ってくるから、今日はお母さんと二人の夕食だ。

「ねえお母さん、高山集落って知ってる？」

大好きなハンバーグを食べながら、なんとなく聞いてみたけれど、お母さんは不思議そうな表情で。

「高山集落……って、あの高山集落？」

お母さんが子どもの頃、大量死があったって場所よね。そんなことがあったからか、今じゃ心霊スポットになってるみたいね。ここからそんなに遠くないところに、そんな恐ろしい場所があるなんて嫌だわ」

ただの雑談のつもりだったけど、心霊スポットになっているのなら聞くんじゃなかった。明日、そこに行くなんてとてもじゃないけど言えないよ。

「それがどうかしたの？」

「な、なんでもないよ。学校で聞いたから、お母さんは知ってるかなって思っただけ」

三十年前に子どもだったなら、お母さんと春風は一緒くらいの年齢なのかな……なんて考えて。

遠い昔や、私が知らない場所の話じゃない。

お母さんが知っている時代、知っている場所で起こったというのが、不気味さに拍車をかけた。

今日はあるえないことが起きすぎて、私の理解が追いついていないのかもしれない。

ご飯を食べ終えて、お風呂に入りながら私は考えていた。

図書室の立ち入り禁止の部屋にあった日記。

なぜそんな物がそこにあったのかはわからないけれど、日記を開くとその持ち主の桜井春風が突然現れた。

それも、三十年前になくなった高山集落から来たと言う。

春風が言うには、六年生が禁足地の積み石を壊してから異変が始まったらしい。

集落の人はゾンビのようになり、人を襲い、さらにゾンビが増える。

そんな場所に明日行くというのだからどうかしてるよ。

「ただ、唯一の救いは高山集落にはもう人が住んでいないということだ。今もゾンビなんでものが存在していたら、小学生の私たちがどうこう出来る話ではないのだから。」

「このままだと、春風が帰れない……か。そうだよねえ。いつまでも太陽の家にいるわけにはいかないもんね」

「そういえば太陽は春風のことをなんて説明したのだろうか。」

「ウインクだけで話を合わせてくれたおじさんは、余程太陽のことを信じているんだろうな。」

「私がそんなことをしても、お母さんには一から説明しなければならぬはずだ。」

「考えるのやめた。春夏秋冬みんなで行くんだもん。きつと大丈夫だよ」

「そうつぶやいてお風呂から上がったけど、あんなことが起こるなんてこのときはまだ考えもしなかった。」

「翌日」

「何があつてもいいように、いろんなものをリュックサックにつめて太陽の家に向かった。途中で冬菜と合流したけど、私とは違ってそのリュックサックに厚みはあまりない。自転車走らせて太陽の家に着くと、太陽と春風は妙に軽装で、いつもと変わらない姿だった。」

「春香、それ何持ってきたんだよ。冒険でもするつもりかよ」

「太陽の小馬鹿にしたような言葉に一瞬悔しくなつたけど、私は負けじと反論する。」

「わ、私にとっては大冒険なの！ お母さんに聞いたら、今は心霊スポットになつてみたいじゃない。そんなところに行くんだから、何が起こつても大丈夫なように準備するでしょ！」

「少し強めにそう言うと、冬菜は理解してくれたのかコクコクと何度も頷いた。」

「なんかごめんね。春香ちゃんも冬菜ちゃんも、怖いなら無理しなくていいよ」

「春風が心配そうに言ってくれたけど、怖いから行かないなら、昨日のうちに断固として拒否している。」

「それよりも過去から来た春風が、この先どうするかという興味もあつたから。」

「それにしても昴のやつ遅いな。何やってんだよ」

と、太陽が昴の家のほうを向いてつぶやいたときだった。

「お、お待たせしました！ 準備に手間取ってしまいました！」

その声と共に、野球に使うプロテクターを身につけた昴が自転車に乗って現れたのだ。

その極端なまでの装備に、私たち一同は呆気にとられて。

「お、お前……野球の試合に行くんじゃないんだぞ」

「何言ってるんですか太陽くん！ 三十年前に消えた高山集落は、今は心霊スポットと

して有名というじゃないですか！ それに、ゾンビが襲ってくるかもしれないと考えると、

みなさんは軽装過ぎるんですよ！」

あ、私と同じようなことを言ってる。

やっぱり身を守るための準備が必要だよな。

それにしても、高山集落はすでになくなったはずだから大丈夫と言ったのは昴なのに。

「わ、わかつたぜ。じゃあ行くか。さっさと行って、高山集落の謎を解いて、昼飯まで

に帰るぞ」

「お、おー」

太陽のあとに私は力なく答えて、みんなで高山集落へ移動を開始した。

遠くに見える山の中に、目的地はある。

春風は太陽のお父さんの自転車に乗り、春夏秋冬と共に川沿いの道を走る。

私は冬菜とたまに学区外にあるクレープ屋まで自転車で行くことがあるけど、今回はそ

んなに楽しい目的じゃない。

よりにもよって、怖がりの私がお心霊スポットに行くと言うのだ。

同じように学区外に行くなら、クレープ屋のほうが良かったなと思いつつ、自転車を

漕いでいた。

「ま、待つてくださいあい！ 僕は自慢じゃないですけど、運動が苦手……鈍足大魔王と

呼ばれてるくらいなんですよ！」

気合を入れてプロテクターなんてつけてくるからじゃないの？

なんて思いながらも、私と冬菜は昴に合わせて速度を落とす。

川沿いの道をしばらく走っていると、次は一面の田んぼが見えてきた。

山に向かつて行って行くことがないからこの景色は初めて見る。

とはいえ、稲の収穫が終わって茶色が広がる光景に、特に感動もないのだけれど。広い道から少し細い道に入り、真っ直ぐ行けば山に辿り着く。

「そういえば、昨日太陽の家でいろいろ見せてもらったんだけど、あんなに薄くて綺麗なテレビになってるんだね。ゲームも凄く綺麗で映画を見てるみたいだったよ」

道中で、春風が思い出したかのように話し始める。

「春風くんの時代って、どんなだったの？ ブラウン管ってテレビは聞いたことあるけど、ゲームはまだドット絵？」

冬菜が尋ねると、春風は少し首を傾げて。

「最近ではポリゴンってやつもあるんだよ。ゲームも変わったなって思ったけど、昨日見たやつはレベルが違ったよ」

私はあまりゲームのことはわからないから、春風が何を言っているのかわからないな。

ゲームはゲームじゃないの？

だけどこうやって話を聞いていると、本当に今の時代の子じゃないんだなと思っ

まう。

そんな話をしながら山に向かっていると、畑仕事をしているおじいちゃんがいて、私たちはいつものように「おはようございます」と声をかけて通り過ぎようとした。

だが、私たちに気づいたおじいちゃんは慌てた様子で道に出て。

「お、おーい！ お前さんたち、どこに行くんじや!? この先は山しかないぞ！」

大きな声でそう言われて、私たちは自転車を止めた。

「用事があつて、山に行きたいんです」

私がそう言うとおじいちゃんは必死に駆け寄ってきて。

「もしかして、肝試しにでも行くこうって言うのか？ あれじやろ、心霊スポットとかいう話を聞いて行くこうと言うんじやろ？」

顔をしかめて私たちを引き留めようとしている口振りに、どう返事をすればいいのかわからず悩んだ。

「えっと……おじいさんは何か知ってたりしますか？ その心霊スポットについて何か」  
相手の出方を探ろうとしているのか、鼻がそんな質問を投げかけると、おじいちゃんの

表情がさらに曇った。

「やめとけやめとけ。何が心霊スポットじゃ。ありやあ……高山集落に降りかかった呪いや。遊び半分で足を踏み入れるんじゃない。『屍妖』にやられるぞ」

「屍妖？ 一体それは……」

おじいちゃんは必死に私たちを止めようと、わざと怖い話をしているのではないかと思ったけど、春風の話と似ている部分が多い。

「……ある日、集落の人間がおかしくなつて人を襲うようになった。あれは人間であつて人間じゃない。生きているようで生きていない。屍の妖……屍妖じゃ」

その言葉に、春風の表情も曇る。

おじいちゃんの話は、春風が言っていたことと同じだったのだから。

「でも、高山集落がなくなつたのは三十年前ですよ。今でもその屍妖はいるのでしよるか？」

プロテクターを身につけた昴が尋ねると、おじいちゃんは首を横に振つて。

「さあな。じゃが、肝試しに高山集落に行ったやつらが行方不明になつたという話はい

くつもある。だからここに住む人間は、夕方になつたら外に出んし、誰かが来ても絶対に戸は開けん。人間じゃないモノが来るかもしれないからな」

今からそこに行こうつていうのに、そういう話をするのはやめてほしい。

いや、もしかしたらこれが引き返す最後のチャンスかもしれないと考えて、私は口を開いた。

「や、やつぱり行くの……」

「でも俺たちは用事があるんだよ。何がなんでも行かなきゃならない理由がある！」

そんな私の言葉を遮るように、太陽が強そう言ったのだ。

おじいちゃんは私たちをジッと見つめて、しばらくして大きくため息をついた。

「……それなら夕方までに戻つて来い。昼間のうちに行つたやつらはみんな帰つて来とる。何言うてもお前さんらは行くつもりやろ。わかつたな？ 夕方までに……じゃ」

諦めたようにそう言つたおじいちゃんだったが、その目は冗談を言っているようには見えなかつた。

おじいちゃんに見送られながら走った私たちは、それなりの傾斜の道に入り、自転車を押しながら歩いていった。

「いやあ。さつきのじいちゃん、目がマジだったな。でもま、俺たちは昼飯までには家に帰るから関係ねえよ。夕方になるなんてないからな」

お気楽というかなんというか。

太陽みたいに樂觀的過ぎるのは考えものだよ。

「それにしても……屍妖ですか。春風くんが言っていたことが嘘ではないと……証明されましたね。はあ、はあ……やはりプロテクターをつけてきて良かったですよ」

運動が苦手な昴は、同じく運動が苦手な私と共に息を切らしながら自転車を押している。

「この道を行けば、高山集落があるの？ 春風くんは道がわかるんだよね？」

「うん。あと一キロ程で集落に入る道があるよ。だからみんな、頑張つてね」

春風が私たちを応援してくれるけど、あと一キロも自転車を押して歩かなきゃならないの!?

もつと楽に行けるものだと思っていた私は、その言葉に絶望を感じずにはいられない

かった。

それでも必死に昴と励まし合って、時に休んで山道を歩く。

三人には随分引き離されてしまったけど、歩き続けてようやくみんなに追いつくことが出来たのだった。

私と昴を待ってくれていたのか、道の脇に自転車を停めて木陰で休んでいる。

「や、やつと……追いついた……みんな早いよ」

「二人が遅いんだつての。だからこうして待ってたんだろ？」

到着するなり自転車を止め、ガードレールにもたれて呼吸を整える。

「みんな揃ったから、休憩したら行こうか。見て。ここが高山集落に続く道……なんだけど」春風が指さした先には、さらに山のほうに入っていく道。

だけどその道には「この先立ち入り禁止」と書かれた看板があって、木の板で壁が作られていた。

長年風雨に晒されていたからか、朽ちてボロボロになっている。

人が通れるくらいの隙間が空いていて、心霊スポット巡りに来た人たちが壊したのか、

自然に壊れたのかはわからない感じだ。

「立ち入り禁止……の場所に縁があるね。またそんな場所に行かなきゃならないなんて思わなかったよ」

「図書室の立ち入り禁止の部屋に、立ち入り禁止の集落に、それで禁足地だろ？ 禁止禁止して、あんまり禁止ばかりされたら破りたくなるってもんだよな」

ため息をつく私とは対照的に、不敵な笑みを浮かべる太陽。

ああ、こいつはこういうやつだったよ。

友達思いなんだけど、なんというか……そう、トラブルメーカーというやつだ。

春夏秋冬班がどれだけ太陽に振り回されてきたことか。

そんな話をしていると、昴が顔をしかめてその立ち入り禁止の看板を見て口を開いた。

「み、みなさん。見てください。立ち入り禁止の下に『この先、入ると命の保障は出来ない』と書かれています……」

さらに私の心にくじくような文言に、ますます帰りたい思いが強くなってしまふ。

「ふ、普通書か!? 命の保障は出来ないとか! こういうこと書くから、心霊スポット巡

りで人が来るんじゃないの?」

「仕方ないよ春香ちゃん。だって三十年前に大量死があった集落だよ? 本当に命の保

障なんて出来なかったんだよ。昔はね」

「ふ、冬菜まで……」

だけど、ここまで来たら一人で帰るなんて逆に怖い。

みんなと一緒にいたほうがまだ安心出来るかもしれないな。

「三十年……集落がどうなっているのか、僕も怖いよ。でも、僕の家があるんだ。みんな、怖かったら来なくても……」

春風が続きを言おうとしたが、太陽がポン

と肩を叩いて歩き出す。

「さ、行こうぜ。みんな一緒なら、なんとかなるって」

みんなそれに続いて歩き出し、私も嫌々な

がらついていく。



太陽 昴に続いて、冬菜と春風が木の壁の穴を通り抜ける。  
仕方なく私もその穴を通り抜けたとき、強烈な耳鳴りがして思わず耳を塞いだ。  
「うっ！」

「どうした春香。蜘蛛の巣にでも……」  
いつものように太陽が茶化そうとしたなど、私が顔を上げると……みんながこちらを見  
て固まっていた。

ただの耳鳴りなのにと思ってた返事をしようとしたけど、みんなの視線が私ではなく、後  
ろのほうに向けられていることに気づいて、私も振り返ってみると……

木の壁の奥、道路で大勢の子どもがこちらを見てニタニタと笑っていたのだ。

「ひっ！」

私が声を上げると同時に春風の声が響いた。

「いけない！ 逃げるよみんな！」

その言葉を合図に、私たちは集落のほうへと走り出した。

## 第二章 人がいなくなった集落で

こんな山の中に、あんな大勢の子どもがいるなんておかしい。

しかも生気のない顔をこちらに向けていて、普通の人間ではないということは直感でわ

